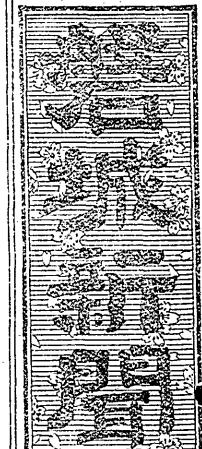


昭和六年五月六日

(可認物便郵三第日二十九年正月四日)

刊 夕 日 四



高月集 昭和戊辰の卷第一集

春題春の海 四月分
大敗の網大漁や春の海
望極やほのく 明くる春
の海

霧笛 夕陽に帆たゞむ春の海企
げり 醉醒の目にうてなや春
の海 上 機船の音それがぞ聞く
春の海 海霧 笛北吹くや春としもなき
の海 海霧 一夢 海の上

巨船はたわむる泡や春
春より海鯨の背に日に斜
春の海宿の千鳥夢まだか
の海

開月 開月 開月 開月

即題 燕 露ヶ浦の面一直線に飛ぶ
燕 燕 電線に鉛なり見る乙鳥
乙鳥や土間に酒樽米俵
春の海の海宿の千鳥夢まだか
の海

天仙耕影 開月 開月 開月

電氣に恵まれた石城郡

平町は縣下第一の明るさ

各町村の利用状況

石城郡は流石に電氣郡の稱

あるだけ植田水力、四倉電

泉、東部電、二本松電の各

會社が互ひに各有する区域

町村に向つて點燈を従事し

て来た結果郡下七ヶ町三十

ヶ村中此の文化の恩恵に

浴さざるものには僅か一部

に過ぎず而して各種工業は

勿論農業の電力等も最近

見れる可きものあるが其の前

調査した本郡下主要町村

に於ける電燈の利用状態を

聞くと郡の主都たる

平町は正に市制を

有がんとするだけ電燈の利

用率は漸通り第一で現在戸

數の九割七分は點火されて

僅に三分が石油燈によるも

のと思はれる、その點火戸

数一戸について十燭光を平

均二個つけぞり本縣の主

都ある福島市を凌駕する

正に一燈一分で本縣において

ても唯一の明るさである夜

半驛に降り立てば如何にも

明るい初感を與へ一見して

ある次ぎは

港ならんとする新銳の町で

あるが今は單なる漁港だよ

ためか夜駆へ出ても誠に暗

い即ち全戸数の五割八分が

</div